

【平成24年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～第2回～

庶民信仰編

「古式ゆかしい社寺の来歴、伝統そして文化遺産」



穂高神社

とき：平成24年7月25日（水）午後7時から

場所：穂高交流学習センター「みらい」

講師：高原正文 氏

講師プロフィール

高原 正文 氏 (たかはら まさふみ)

信濃史学会評議員。元豊科町郷土博物館長。

1952年(昭和27年)生まれ。安曇野市豊科新田出身。現在は豊科成相見岳町に居住。

1979年(昭和54年)豊科町に博物館学芸員として採用され、長らく豊科町郷土博物館等の学芸員を務め(専門:民俗学、美術史)、「日本名刀展」「地籍図展」「南安曇の道祖神展」などの特別企画展を次々に企画・開催した。

1992年(平成4年)豊科町誌編纂委員に委嘱され『豊科町誌』の執筆、編集に携わった。

2003年(平成15年)4月から1年間、豊科町郷土博物館の館長として豊科町が生んだ社会派映画の巨匠熊井啓(豊科町名誉町民)の顕彰事業に専念した。

2010年(平成22年)信濃史学会定期総会で「安曇野市中心市街地の近代史」を研究発表。

著書『安曇野史への招待』(信毎書籍出版センター) (単著)

『長野県民の戦後六〇年史』(信毎書籍出版センター) (共著)

『生活環境の歴史的変遷』(雄山閣) (共著)

『大町安曇の今昔』(郷土出版社) (共編著)

□概論 安曇野の社寺の地理的環境ごとに見た分布と傾向

(1) 西山山麓・山中の社寺

○中世西山山麓に沿った古い千国街道沿いに中世の豪族古厩氏(仁科氏系)、堀金氏らの山城と古刹が分布。満願寺(真言宗)は松本藩主の庇護もあつかった寺である。

○西山山麓にある神社の有明山神社は山岳信仰の場で、明治初頭宮城という人里離れた地への開設で、成り立ちは通常の村の「鎮守」(「氏神」から発展)とは趣が大いに異なる。通常、たいがいの神社は穂高神社の元「国幣小社」をはじめ「村社」「郷社」等の社格をもつが、有明山神社に限っては「雑社」でもなく、位置付けようがない「無格社」である点が注意される。

(2) 梓川、黒沢、烏川の複合扇状地の扇端にひろがる平坦部の社寺

○穂高神社、住吉神社、矢原神明宮のような郡や庄園の総社的な神社が分布。穂高神社は民心宣撫の特別な神社として安曇郡における時の最高権力者が式年造宮を務める場合が多かった。住吉神社、矢原神明宮は開発神を祭り、開発の拠点の色合いが濃い。矢原御厨は伊勢神宮領という形態の庄園のあり方を示し、鎌倉時代初頭の『神鳳抄』(全国に分布した伊勢神宮領の書き出し記録)に掲載された仁科御厨(大町市)とともに注意される。諏訪社が異様に多い。

○近世になってようやく開発された郷村には在郷町のような町場を除き、あまり寺院の進出は見られない。真々部のような一見郷村に見えながら中世に都市を形成していたところには金龍寺、専念寺のような古刹が集中して見られる。三郷の上長尾の平福寺は郷村の中に位置しているが、平安末から中世にかけては住吉庄領民の総菩提寺的な位置づけの古刹である。

(3) 東山山麓・山中および大穴山山腹

○川手筋には麻績御厨、会田御厨が象徴するように神明宮の分布が目立つ。

○中世、光氏、塔原氏など豪族の菩提寺として創建された寺が真言宗、曹洞宗の寺として山麓に分布する一方、宗林寺のような浄土宗の寺院は民間信仰の場ともなり念仏講普及の道場となったことで庶民に身近な寺の印象を与えていた。

□古式ゆかしい神社

1. 穂高神社 安曇郡の総社的存在

(安曇野市穂高)



穂高神社境内



祭神(中殿:穂高見命、左殿(向かって右):綿津見神、右殿(向かって左):瓊々杵尊

(1) 来歴

- ① 出発は御岳信仰の可能性を残す。安曇族の奉斎神として崇敬あつた。
- ② 平安前期に『延喜式』(927年<延長5年>)の神名帳に登場する(式内社)。
- ③ 中世には神宮寺を構える。神仏混淆(本地垂迹)の思想による。近世、穂高薬師として霊験あらたか。
- ④ 近世には南宮に諏訪大社の祭神を祀り御柱立ての神事も行われた。
- ⑤ 式年造宮の「大旦那」は安曇郡における時の最高権力者が就任。細萱氏→仁科氏→松本藩主。

(2) 祭神 穂高見命、綿津見神、瓊々杵尊。別殿に天照大神。

(3) 伝統

- ① 穂高神社例大祭と「お船祭りの習俗」(昭和38年2月1日長野県選択無形民俗文化財、平成21年長野県指定無形民俗文化財に格上げ指定)

[宵祭り] 9月26日。お布令 [本祭り] 9月27日。御船祭り 穂高人形飾り物

御船祭りの芸能分類は つくりもの風流

- ② 穂高神社のお奉射神事

3月17日。宮司らが四方の悪魔払いのため「神の矢」「殿の矢」を射たあと、神楽殿に「甲乙ム」(甲乙無し)と書いて掲げられた大的を掲げ矢を射て、その年を占う。

- ③ 穂高神社の式年遷座祭

神領の四至に榊立を行い、神域を設定。近年の状況 大遷宮 平成21年(2009)実施 小遷宮 平成28年予定、平成34年予定。

- ④ 穂高神社奥社例大祭

(4) 文化遺産

- ① 古文書『三宮穂高社御造宮定日記』 ② 鷲足膳
- ③ 本殿 穂高造(一間社流造の変形で勝男木、脇障子に特徴が表れている)

(5) エピソード

- ① 豊田利忠『善光寺道名所図会』(天保14年<1843>)掲載の穂高神社の俯瞰図には、神社周辺の文物として天神原、天神祠、高島一翁筆塚、五本杉、二本杉、神宮寺跡、仁科街道が紹介されているし、本文では一翁の孫高島章貞の「穂高岳記」を紹介。この二人の医師にして文化人は穂高の誇りで穂高神社境内に一翁筆塚が現存のほか、高島章貞顕彰会により高島章貞の歌碑が建てられている。



高島一翁筆塚



高島章貞歌碑

2. 矢原神明宮 中世、矢原御厨の中心となる神明宮

(安曇野市穂高矢原)



矢原神明宮境内

(1) 来歴

- ① 矢原神明宮の前面に宮沢(矢原沢の本流)が流れ、方格地割がなされ、古代には野原郷の郷庁(政庁)があった場所と推定されている。開発の拠点として御厨神明宮がおかれ伊勢神宮領と位置付けられた。中世には矢原庄の中心地として神明宮の前面に集落が発展。
- ② 『神鳳抄』(建久4年<1194年>)によれば矢原御厨の所領を「一八九一町歩」(2205ha)と記す。
- ③ 中世、安曇郡の大半の村が穂高神社の造宮の奉仕の所役を果たしているのに、矢原郷(矢原村)だけが果たしていないのは矢原御厨神明宮に直接奉仕する「宮本」であるだけでなく、矢原神明宮の重要性を証明する。

(2) 祭神 天照大神

(3) 伝統

① 山葵甫祭

昭和24年4月13日に伊勢神宮の御料として歳旦祭と新嘗祭に献ずるわさびを栽培する圃場(わさび田)を御法田に設定。それ以来、毎年9月24日伊勢神宮から神職が出張し矢原神明宮の管理により御法田でとり行う。(『南安曇郡誌』第3巻下)

② 例大祭に於けるブタイと御船の曳行 9月第3土日。御船は穂高神社の御船と同じ構造。

3. 山の神社 やま かみしゃ 烏川山の入会地の口元に位置した、安曇野でも代表的な山の神

(安曇野市堀金岩原)



山の神社境内

(1)来歴

- ①もとは烏川左岸にあったが、洪水で流されたため、須砂渡こべ沢の現在の位置に移転。
- ②烏川谷 17ヶ村の薪、刈敷の入会山の山神。
- ③昭和 38 年、岩原の鎮守となる(それまでは上堀にある諏訪社を鎮守とした)。

(2)祭神 山神

(3)伝統

- ①例大祭(4月 29 日)における御舟担ぎ 山の神社に係る山元の岩原、上堀、下堀により挙行。牧もこの例大祭に特別招待される。この船の特徴は台車が無く、担ぐ方式であること。

4. 賀茂神社

(安曇野市堀金田多井)



賀茂神社拝殿



賀茂神社本殿

(1)来歴

- ①京都賀茂神社の分神を勧請したという。創建年代不明。
- ②明治 41 年(1908)、宇原山の山神社境内の現在地へ移転。

(2)祭神 別雷神、賀茂若雷神、健御名方命

(3)伝統

- ①例大祭における「お練り馬神事」神馬を先頭に宮司、氏子総代表が馬に乗って練り、御神符を配る。かつて農耕馬がたくさんいた頃は、馬つ飛ばし神事が行われた。平成 23 年に「お練り馬神事」の形で復活させた。

(4)文化遺産

- ①本殿 寛政 4 年(1792)、浅川豊八(大隅流宮大工伊藤長左衛門矩重の弟子。岩原村出身)による建造。総体白木造の一間社流造。向拝正面に軒唐破風がつき各所に彫物を施す。主屋正面の「波に菊の葉」、左妻飾りにつく「瓜に鼠」が優れている。立川流の技法もうかがえるとされ、南北安曇地方に豊八が棟梁として残した作品では、これは最古のものとの指摘もある。

5. 住吉神社 中世長講堂領であった住吉庄 18 郷の鎮守。穂高神社同様、海神を祭る。(安曇野市三郷楡)



住吉神社境内



住吉神社例大祭の御船

(1) 来歴

- ① 文禄年間に穂高神社に次ぐ社領 7 石を受けている。
- ② 慶長 20 年(1615)4 月、松本藩主小笠原秀政は当社神主に対して御宝殿造営のため三反歩寄進。
- ③ 本殿は享保年代のもの。

(2) 祭神 表筒男命、中筒男命、底筒男命。ほかに神宮皇后、健御名方神を合祀。

(3) 伝統 例大祭(4 月最終土日)の御船。船は住吉、楡の両地区から 1 台ずつ奉納される。海人族の安曇族が奉斎していた「住吉神(すみのえのかみ)をしのぶために始まったという。戦前は船につける飾物を両地区で競い合ったが、今は住吉地区のものは船に松や御幣がつくだけで、飾物は楡のものに残る。ただし遷宮の時には住吉地区の船にも飾物をつける。

6. 熊野神社 巨大なお船祭りと中萱加助の逆さ杉で有名 (安曇野市三郷明盛中萱)



熊野神社境内



下中萱から移転した八坂社本殿

(1) 来歴

- ① 文禄年代の筑摩安曇両郡郷村御朱印御高付に「四石ハ熊野権現領」とあり、穂高神社の 15 石、住吉神社の 7 石 に次ぐ待遇を、細萱の諏訪社とともに受けている。
- ② 当社は多田氏の勧請によるものとされ、本殿の開閉を同氏が行ってきた。
- ③ 神宮寺があったが松本藩主石川康長が松本城築城の際に取り壊され用材に充当されたという。

④江戸中期まで祭りの「おふりょう」は多田氏の屋敷前で勢ぞろいし渡っている。

(2)祭神 伊弉册命、速玉男命、素盞鳴男命、泉津事解男命

(3)伝統

①熊野神社例大祭の御船 紫石会が主役。県下に類を見ない巨大な船を曳行。

(4)文化遺産

①熊野神社本殿 三間社隅木入春日造。正面向拝の臺股に「抱茗荷」の社紋。17世紀中期の作。

②八坂社本殿 明治40年下中萱から移転。中世に中萱が六日市場という市場だったことを裏付ける。一間流造、元柿葺。17世紀後期の建築とされる。

③「逆さ杉」の異名をもつ旧御神木 中萱加助の杖が根付いて大木になったという千年杉の古木。

7. 田沢神明宮 中世の神仏混淆(本地垂迹)と獅子舞で知られる (安曇野市豊科田沢)



田沢神明宮拝殿



船石

(1)来歴

①鎌倉時代に会田御厨が海野氏の会田小次郎によって開設されたことにより弟の田沢四郎が田沢郷の開発の拠点として創設。川手筋は会田御厨、麻績御厨から知られるように神明宮の分布が多い。

②中世の神仏混淆の影響を受け、神社西向かいの高台「神宮台」にはかつて円満寺という神宮寺があったが、武田信玄の信濃侵攻の際の兵火で焼失したといわれる。

(2)祭神



由緒書

由緒書によれば「一 御祭神 天照大日〇尊(天照大御神)」とあり、祭神を天照大神と大日如来とを

表裏一体(神仏混淆<本地垂迹>)としてとらえている。写真のとおり拝殿は明らかに寺院様式で、奥に神明造の本殿を構える。

(3)伝統

- ①田沢神明宮奉納獅子舞 芸能分類は獅子神楽
- ②当屋制の遺制 社殿を構え祭神常在になってからも残る。

(4)文化遺産

- ①船石伝承 船石はかつて神宮台の東端にあった。説明板に「安曇野開拓の祖日光泉小太郎神明宮(天照皇大神)の神恩に報いんが為に天の磐舟を造りて献げ置きし処何時しか石の舟に変ぜり天文年間心なき者此の舟石に穴をうがち砕かんとしたところ神罰に依り其の者俄に死せりと伝承せらる」とある。

8. 五社神社

(安曇野市明科光中条)



五社神社本殿

(1)来歴

- ①もとは犀川べりの古宮にあったが、安永8年(1779)洪水で危険になり字山岸の現在地へ移転。北隣に長光寺(真言宗。高野山龍光院末寺)が位置する。
- ②明治35年、火災で旧本殿焼失。
- ③明治44年、現在の本殿再建。

(2)祭神 『明科町史』によると明治初年の時点では天照大神、伊弉册命、豊受姫命、速玉男命、事解男命の5神という。明治9年の『長野県町村誌』には、武甕槌命、経津主命、天児屋根命、太玉命、彦火火出見命の5神とある。

(3)伝統 例大祭の運営は旧光村の南村、中条、北村の三区が年番で当番区を決めあたる。同じ旧光村でも野田は田沢神明宮への奉仕で運営には加わらない。例大祭にはお船が曳行される。

(4)文化遺産

- ①本殿 明治末期建造のこの本殿には江戸後期信州で隆盛をみた建築彫刻の諏訪立川流の白木彫刻が再現。彫刻は松本清水の彫刻師清水虎吉。入母屋造社殿。

□古寺を訪ねて

1. 松尾寺 (真言宗)

(安曇野市穂高有明古厩)



国重要文化財「松尾寺本堂」(薬師堂)

(1) 来歴

- ①松尾寺の中興の開基は『信府統記』によれば「中興ノ開基ハ大永八年<1528>仁科盛政」とあるが、実際には仁科氏の支族仁科安芸守盛国の三男古厩平兵衛盛兼である。盛兼は建造にあたり範を大町市曾根原にある盛蓮寺の観音堂(国重文)にとったという。古厩氏はこの大永年間(1521～1528)ころ古厩郷を支配するに至ったと考えられる。
- ②本堂(薬師堂)内部の外陣南側上部の壁板に「甲州住 人口信 同道十人 右□□ 天文三年□正月□日」の落書きがある。建立が天文3年(1534)以前であることは明らかである。
- ③江戸時代を通じ松本藩から寺領 10 石を給せられていた。

(2) 文化遺産

- ①本堂(薬師堂) 昭和 24 年国重要美術品、昭和 34 年国重要文化財に指定。桁行 3 間、梁間 3 間、寄棟造。軒の出を非常に深くしている。室町時代末期の作。

2. 満願寺 (真言宗)

(安曇野市穂高牧栗尾山)



満願寺本堂



微妙橋

(1) 来歴

- ①猪鹿牧との関わりにおいて創建された可能性がある。高野山龍光院の末寺として人里離れた山中に建てられた。

②弘治 2 年(1556)の勤進沙門による栗尾山精舎再興状によると「本寺は坂上田村麻呂の創建」「本尊は地中から湧出した千手観音」「本堂の前を三途の川が流れ、罪障の重い人は渡れない」「左右の山は死出の山で道が六つに分かれ百三十六の地獄がある」「東北の鬼門にある毘羅樹には罪障人が死後集まってくる」「一度本寺に参詣すれば罪障を消すことができる」など記載され、中世には早くも安曇平の人々の精霊が集まる霊山だったことがわかる。

③江戸時代になって松本藩主の庇護あつく慶安 4 年(1651)の検地では寺領 77 石を与えられている。

④江戸後期には著名な寺院として観光的に知られ、多くの参詣人で賑わったことが十返舎一九『続膝栗毛第八編』(文化 13 年)や豊田利忠『善光寺道名所図会』(天保 14 年)に満願寺のことが詳しく書かれていることからわかる。文化年間、十返舎一九は成相新田(現豊科市街地)を起点とする代表的な栗尾街道(栗尾道)を通り、満願寺を取材している。特にこの栗尾街道(栗尾道)には元禄年間に新田町村庄屋の藤森与兵衛が「南無観世音菩薩」と刻んだ名号塔を兼ねた道標を建立し、配置しており、栗尾山満願寺への街道の道筋を示している。(※南安曇郡誌には「栗尾街道」、穂高町誌には「栗尾道」と記載されています。)

(2) 伝統

①8 月 9 日の観音縁日における新仏迎え 『南安曇郡誌』第 3 巻下には「八月九日は満願寺の観音縁日で、古来からの慣習として、安曇平一円から新盆の仏迎えとして参拝する者で賑わう。これは本尊千手観音の四万八千日の縁日であって、満願寺本堂建立の時、藩主の発意によって安筑の領民の総菩提所とされ、先祖の供養日としたことによると伝えられている」と書かれている。安曇平の住民は新仏を迎えにいくのに栗尾街道(栗尾道)という参詣道を使うのが、かつての習わしだった。

(3) 文化遺産

①微妙橋 三途の川にかかる欄干屋根付太鼓橋(橋長 13.05m、幅 3.6m)。手前に六地藏を配し、対岸に地藏堂を配置する。橋は明治 39 年木曾福島 of 棟梁瀬川伊勢松らによって建造。橋板の裏には経文「陀羅尼」が梵字で書かれており「御経橋」という。善男善女が西方浄土へ渡る橋ともいう。

②聖天堂 明治 28 年東穂高村在住の木曾福島出身の棟梁瀬川伊勢松の建築。唐破風の軒、柱などに繊細な彫刻が施されている。堂内には歓喜天が安置されている。また天井には安曇十狩野とうたわれ名声があつた望月硯斎の「飛天」が極彩色で描かれている。説明板には格天井に藤森桂谷により「龍」も描かれているとある。

3. 安楽寺跡 (曹洞宗)

(安曇野市堀金岩原)



旧安楽寺の宝篋印塔



安楽寺山門跡

(1)来歴 創建は文明末年(1486)頃。この寺の旦那は最初細萱氏であったが途中で堀金氏に変わっている。創建当時は臨済宗の寺院だったといわれる。岩原城の麓に位置し石垣が築かれていた。庫裡は廃仏棄釈後、穂高の小川家で移築、さらに明治34年ころ豊科の法蔵寺に再移築されている。

(2)文化遺産

①旧安楽寺の宝篋印塔 明和5年(1768)安楽寺十三世見住隆峯友巖和尚の時に今の堀金、穂高、豊科、三郷の地域に住んでいた女性が自分たちの関係者百余人の供養のため浄財で建てたとされる。

4. 平福寺 (真言宗)

(安曇野市三郷上長尾)



平福寺



平福寺観音堂

(1)来歴

- ①寺伝によると長徳年間(995~998)の創建という(『信府統記』にも同様の記述)。
- ②住吉庄の在地領主(地頭)や庄園住民の祈願寺として創建されたので、住吉庄庄民の精霊が集まる霊場との位置づけである。この点、矢原庄の祈願寺の満願寺と同様である。この霊場への参詣道が長尾道で特別な道と見られていた。この寺の末寺には豊科下鳥羽の日光寺があり、日光寺への参詣道として日光寺道が設定されていた。
- ③観音堂鰐口銘に「永享三年(1431)三月大旦那讃岐守(西牧)憲兼寄進」とあり、室町時代当時、西牧郷の地頭西牧氏がこの寺の大旦那だったことが知られる。
- ④『信府統記』によれば天正三年(1575)大旦那大守勝頼(武田勝頼)再興の棟札があるという。武田勝頼が天文年間の兵火で焼失した伽藍を再興したものと考えられる。
- ⑤江戸時代、松本藩主の祈願所であった。この点も満願寺に類似する。

(2)文化遺産

- ①聖観音菩薩像(長野県宝) 像高149cm。寄木造。平安時代末期の作で旧南安曇郡内最古の仏像。
- ②観音堂 梁間四間、桁行三間、入母屋造、元柿葺。内陣にある宝永3年(1706)の祈願札などから推して18世紀初頭の建築と見られる。

5. 法蔵寺 (浄土宗)

(安曇野市豊科新田)

(1)来歴

- ①永正三年(1506)、丸山丹後守により平瀬養老坂上の寺坂から豊科吉野梶海渡へ移建。
- ②慶長十六年(1611)、慶長十三年(1608)に建設された成相新田宿の旦那寺として松本藩主石川康長家臣青山出羽、吉野村郷士丸山丹後守、岡村小兵衛によって「屋敷構え」(堀の内)であった現在地

へ移転。



山門



旧安楽寺にあった庫裡

- ③元禄九年(1696)、同年の書き上げによると、寺付属の二十石四斗余、檀家 600 軒。境内は東西三町、南北二町半。
- ④享保九年(1724)、同年の『信府統記』に寮舎が 6 軒(立生軒、宝樹軒、傳相軒、眞龍軒、称揚軒、正受軒)あり、と見える。
- ⑤明治四年(1871)、廃仏毀釈で廃寺。
- ⑥明治十三年(1880)、再興。

(2)文化遺産

- ①山門(長野県宝) 寛政元年(1789)伊藤長左衛門矩重の作
- ②鐘楼門 寛政元年(1789)伊藤長左衛門矩重の作
- ③寛文六年(1666)造立の地藏尊
- ④庫裡 旧安楽寺の建物だったものを穂高の小川家(屋号 大和屋)で引き取ったが、明治 34 年ごろ更に法蔵寺へ移転したもの

6. 宗林寺 (浄土宗)

(安曇野市明科光北村)



宗林寺山門



石川数正夫妻の宝篋印塔

(1) 来歴

- ①天正三年(1575)に善譽故念の開基で当初は宗源寺とあったが、松本城主石川数正の子康長の帰依

を受け数正の死に際して菩提寺として本堂が再建され宝篋印塔が建てられ、寺名も数正の戒名〈秋岳院殿高月宗林大禪定門〉の〈宗林〉から宗林寺と名付けられた。

②元禄 11 年の光村色々書上帳によると「京知恩院末寺」とあり「客殿 長九間三尺、横七間、庫裡 長九間、横六間、山門 長二間、九尺」のほか境内には「清正院 客殿長七間、横六間、龍太院 客殿 客殿長七間、横六間、往源院 客殿長五間、横四間」とあって 3 つの塔頭があったことがわかる。当時の檀家数は約 250 軒であった。

③文化年間に徳本上人が信濃巡錫の折、この寺に立ち寄り念仏講の講話を行う。

(2)文化遺産

①山門 八脚楼門式、入母屋造、瓦葺(元茅葺)。天明元年(1781)から文化四年(1807)にかけて造られた。階上を鐘楼とし天井には狩野梅玄により火伏せの龍が描かれている。

②本堂 間口五間、奥行五.五間、平屋、入母屋造。この本堂は松本伊勢町の生安寺の旧本堂を昭和 38 年に移築したものである。300 年程前の江戸時代中期以前の建築である。

③宗林寺の石造宝篋印塔

□山寺の重要な文化財

1. 光久寺(真言宗)の木造日光・月光菩薩立像 (長野県宝)

(安曇野市明科大足清水)



2. 泉福寺木造金剛力士立像（長野県宝）

（安曇野市明科南陸郷寺村）



吽形（向かって左に立つ）



阿形（向かって右に立つ）

○阿形の像高 193cm、吽形の像高 192cm。寄木造。檜材、彫眼。髻のところに「永正十年 仏師 西牧 三郎五郎」の修理銘が残る。室町初期作。

□附 明治初年開設の神社

1. 有明山神社

（安曇野市穂高有明宮城）



有明山神社全景



日光東照宮陽明門を模した裕明門

(1) 来歴

- ① 倉田為吉(天明行者)による創設
- ② 岡村阜一による再興→有明講の普及
- ③ 藤森桂谷の関与
- ④ 信濃日光

(2) 祭神 手力雄命、天鈿女命、大己貴命、八意思兼神

(3) 文化遺産

- ① 裕明門 明治 35 年に日光東照宮の陽明門を模し建築。切妻軒唐破風八脚門。内外の彫刻は立川流彫刻師清水虎吉、格天井画は村田香谷が手がける。
- ② 手水舎 飛騨の匠山口権之正の作。紅梁、天井に美しい彫刻が彫られている。
- ③ 神楽殿の天井絵 藤森桂谷の尽力により橋本雅邦「鳥」など。
- ④ 『残月集』